

第63期第4回「東日本大震災」被災支援委員会報告

小池 正造 (支援委員会)

11月12日第3回常置委員会後に大宮教会を会場に第4回委員会が開催されました。

はじめに秋山委員長より報告がなされました。①2014年3月11日～14日に開催される東日本国際会議に、教区より熊江副議長、飯塚宣教部委員長が出席をいたします②10月28日～30日にかけて第2回被災地・被災教会で祈りをあわせる旅が、39名の参加者を得て行われました。アジア学院、仙台エマオ、石巻、石巻山城教会、会津放射能センターを訪問しました。詳細については、教区通信合本版(2013年12月)で報告をいたします。飯塚統括主任より、水戸中央教会の工事着工時期の変更について報告がされました。小林委員より、ボランティア派遣の状況が報告されました。最近の状況として、新しくボランティアに参加される方よりも、リピーター(再訪問)の方が増えていることが報告されました。また、11月20日からキッチンボランティアとして、狭山教会の方々が奉仕してくださいます。感謝です。

清愛幼稚園(四條町教会)への教団幼稚園舎建築資金貸出申請について、承認をいたしました。

佐野教会へ秋山委員長、飯塚統括主任が、訪問をし、今後の再建計画について話し合う予定です。

来年3月9日に行われる教区「東日本大震災」記念礼拝について、筑波学園教会を会場に行う方向で準備を進めています。説教者は、小林祥人茨城地区委員長です。覚えてご参加ください。

キッチンボランティア派遣について意見交換をいたしました。仙台エマオから関東教区が行っているキッチンボランティアの派遣について、大変に感謝されています。今後も、より多くの方々に参加していただきたいと考えています。しかし、作業負担を軽減するための「1組3名」がネックとなって、気軽に応募することが困難です。これを解消していく何らかの方法を模索していき、徐々に実行していきます。

次回委員会は、2014年1月17日に大宮教会で行われます。

日本基督教団東日本大震災救援募金

*現在の募金状況(2013.11.25現在)

¥626,525,281

「東日本大震災救援募金」

¥365,509,007

「東日本大震災海外献金プロジェクト」

ボランティア募集

12月～2月のボランティア募集

12月25日(水)～27日(金)

1月14日(火)～17日(金)

2月11日(火)～14日(金)

問合せ 小林祥人(090-3529-5140)

食事ボランティアを大募集します。

1チーム3名以上でお願いします。

「共に希望を探す交わりを」

長倉 望（新潟教会）

十日町教会の新井純牧師と共に被災地巡回訪問を重ねてきましたが、今回は11月18～20日、福島県を中心にお訪ねしました。（会津放射能情報センター、川谷教会・川谷保育園、白河教会、原町教会・原町聖愛保育園、東北教区被災者支援センターエマオ、仙台北教会・東北ヘルプ、日本聖公会若松諸聖徒教会）。

中でも印象に残ったのは、二つの保育園で伺ったお話です。

川谷保育園で印象的だったのは、各家庭の経済状況が選択肢に大きな影を落としているという指摘です。一人の稼ぎで子育てができる収入があれば、働く父親だけが福島にとどまり母子は避難する、保養に出かける、という選択肢があるが、共働きでないと子育てができない場合、そのような選択肢はなく、たとえば工場労働などは、福島から離れて移住しようとしても次の雇用のあてがない状況のなかで、福島に釘付けされるようにして懸命に子育てをしている状況がある、とのこと。福島全体を重たい空気が覆いかぶさり、相当のストレスを抱えながらみんな生活していること。今後そのストレスが犯罪率の増加などにつながるのでは、との懸念があるとのことでした。また、「原発事故後の初期被曝の問題を見過ごすわけにはいかない」とも強調されていました。「現在の空間線量はそれほど高くないが、初期被曝でおよそ5年分の放射線を1ヶ月で受けたと考えると、これ以上少しでも上乘せするような被曝を子どもたちにさせたくない」とのことから、400m先にある体育館に移動する時ですらマイクロバスで移動しているそうです。

原町教会でも、子どもを育てるといえる点で言えば、原町は比較的空間線量が低いが、すぐ隣には線量のものすごく高いところがあり安心できないこと。放射性物質の驚異に加えて、「これをしたら補償金が減るのではないか」「これをしたら補償額が増えるのではないか」ということでしか物事を考えなくなっていく大人たちの姿や、希望を失い退廃的になっていく大人たちの姿を見ながら子どもが育つことへの心配。原発や汚染の問題が人間関係を複雑で困難なものにしており、そのストレスが家庭で女性や子どもへの暴力という形で現れていること。麻薬が被災地に出回っているという噂があったが、実際に最近原町で麻薬所持の逮捕者が出たことなど・・・本当に口先だけの信仰ではなく、今まで大切だと言ってきたことをこの厳しい現実の中で実際に生きていくことができるのかが問われている、との言葉に身を糺される思いでした。

未来への希望が見えない状況、閉じ込められているかのような閉塞感、ストレスによる暴力やアルコール・薬物依存の問題・・・福島で感じた現実、実は私が学生時代に出入りしていた「釜ヶ崎」の状況と似ているのではないかと、思いはじめています。放射能汚染の現実と向き合い生きていこうとする時、チェルノブイリはもとより、釜ヶ崎をはじめとして、人の命と向かい合い、命を助け、命を守ろうとして働きと蓄積されてきた経験に聞き、学んでいくことがもっと必要になるのではないのでしょうか。放射能汚染の問題の多くは政治の問題であり、粘り強く政治に働きかけることが大切です。それと同時に、共に課題に向かい合い、共に希望を探す交わりを、どう形作っていけるのか、それが私たち教会に問われているもう一つの課題なのだと思います。